

二〇二二年度 第一回 入学試験問題

適性検査

I

(立川国際・南多摩型)

試験時間 四十五分

注 意

- 1 問題は **1** のみで、**5ページ**にわたって印刷してあります。
- 2 声を出し読んではいけません。
- 3 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、**問題用紙と解答用紙を提出してください。**
- 4 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書いてください。
- 5 **受験番号**を解答用紙の決められたらんに記入してください。

佼成学園女子中学校

受験番号

1

次の「文章」を読み、あとの問題に答えなさい。

(※印の付いている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

「文章」

日常会話だけでは学習言語を身につけることができない。学習言語を身につけるには、本を読む必要がある。

小学生のレベルを越えた※語いのほとんどは話し言葉でなく書き言葉の中に出現する。ゆえに、本を読んでいないと、小学生レベル以上の語いを身につけることができない。「だって、そんな言葉、友だちとの会話で使わないし、※LINEでも使わないし」と言う学生の言葉は、まさに的を射たものと言える。高校生や大学生でも、日常会話で用いる言葉は、小学校高学年の児童とほとんど変わらない。

他者との会話の中で知らない言葉に出会うということは、小学生以降はほとんどなくなる。そこから語いレベルを上げるには、文章にその学習源を求めるしかない。語い獲得かくとくに関する研究においても、日常会話を越える語いの学習源はほぼ書籍しよせきに限られるとされている。

結局、生活言語だけでは知的発達を※促進そくしんすることはできないのである。※認知発達ちんちにより抽象的思考ちゆうしやうてきができるようになる中学生以降は、抽象的思考を可能にする学習言語を豊かにすべく、本に親しむことが必要になる。

小学生であっても、大学生であっても、本を※媒介ばいとすることで、ふだんの会話では使わないような言葉を会話の中に織り込むことがで

きる。それは、親子、教師と児童・生徒・学生、友だち同士、いずれの関係にも言えることだ。

※SNSエヌエヌエスに浸るひたような生活をして、単純な文しか読まないでいると、学習言語の発達に支障しやうを来しきたかねない。発達の最近接領域きんせつりやうという考え方についてはすでに紹介しょうかいしたが、今できることの少し先を刺激しげきされることで知的発達が促進される。

その意味では、現段階で簡単に読める本ばかりを読むのではなく、ちよつと難しいなどと思うような本に挑戦ちやうせんすることで、語い力や読解力よんげりきが鍛えられていくのである。それが学習言語の発達に※寄与きよし、思考力や想像力を高めていく。

インターネットの時代になり、何かわからないことや知りたいことがあればインターネットで検索けんさくすればよいという感じになり、自分の頭でじっくり考えることを省略する風潮が※顕著けんちやくになってきた。

そのようなことを授業中に話すと、
「ネットで検索するのと考えるのと、何が違うんですか？」

と言う学生もいる。たしかに自分で考えるといっても、頭の中に浮かぶ言葉をめぐってあれこれ考えるわけで、ア自分の記憶きおくを検索していい面があるの否定できない。だが、読書も含めて自分自身の経験に根ざし、年月をかけて※熟成じゅくせいした思いや考えをこねくり回すのは、自分自身から切り離はなされてネット上にある情報を検索し引き出すのとはまったく様相ようさうが異なる。

学生たちのレポートをみても、インターネットが普及してからは、ネット上で検索して出てきたものを切り貼りしたものが目立つようになった。なかには、途中まで「である」調だったのがいきなり「ですます」調に変わったり、明らかに筆者が専門家であるのがわかる文章がそのまま地の文になっていたりして、切り貼りであることがあからさまにわかるものまであり、自分の考えを書いているかのように小細工をすることさえ考えつかないのだなあと思えることもある。

それほどまでに他人の考えた文章を切り貼りするのがごくふつうのことになっていくということかもしれない。それが悪いことだということ意識が薄い。それは、盗作※盗作という意味で問題だけでなく、自分の頭でじっくり考えることを放棄してしまっているという意味でも問題である。

思考を深めるには、まず文章にしてみるとよいと言われる。それは一理ある。私は、心理学者として※カウンセリングもしてきたが、カウンセリングが効果をもつのも、じっくり耳を傾けてくれる聴き手かたむの前に、思い浮かぶことを語っていくうちに気づきを得られ、これまでと違った構図のもとに自分の経験や思いを検討できるようになるからである。

それと同様に、日記を綴るつづるように自分の思うことを書いていくことで気づきを得られる。自分の内面に渦巻くモヤモヤした思いを文章にすることで、心の中が整理されていく。言葉にするとということは、言葉を用いてモヤモヤした頭の中を整理することに等しい。

私たちは、自分の心の中で経験していることをそのまま取り出して理解することはできない。経験そのものが言語構造をもっているわけではないからだ。

何だかわからないけれども、心の中がざわついて落ち着かない。なぜかイライラしてしょうがない。何だろう、この物足りなさは。何だろう、この焦あせっている感じは。そんなふうに、言葉にならない衝動的なもの、感情的なものが、自分の中に渦巻いているのを感じることもある。

そのようなモヤモヤした心の内をだれかに伝えるには、それを言葉ですくい取らなければならない。言葉にしない限り、そうした経験について人に語ることができない。自分の思いを書いたり語ったりすることが大事だというのは、それが自分の過去の経験や現在進行中の経験を整理することにつながるからだ。

自分の内面で起こっていることを書いたり語ったりすることは、まだ意味をもたない解釈かいしゃく以前の経験に対して、書いたり語ったりすることのできる意味を与えていくことだと言ってよい。それによって経験が整理されていく。

その際、語りが乏とぼしいと、内面をうまく言語化することができず、なかなか頭の中が整理できない。つまり、思考が深まらない。内面のモヤモヤを言語化して思考を深めるには、語りの豊かさが求められる。そうになると、本を読まない者が増えているという最近の風潮は、危機的と言ってよいだろう。

思考を深めるのに読書が役立つというのは、語りが豊かになるという意味だけではない。自分自身を見つめる機会になるという意味もある。

本を読むことを情報収集と位置づけている人は、自分のしていることに今すぐ直接役立つ情報のみを求めて実用書ばかりを読む傾向がある。実学志向が強まっている今どきの学生にもそうした傾向がみられる。だが、それでは思考は深まっていかない。

本を読むことの意味は、けっして情報収集のためというだけではない。本を読んでいると、自分の記憶の中に眠っているさまざまな素材が活性化され、ふだん意識していなかった記憶の断片が浮かび上がり、それをきっかけにいろいろなことが連想によって引き出されてくる。「そういえば、あんなことがあった」「こういう思いになったことがある気がする」「同じようなことを考えたことがあったなあ」「あれはいつのことだったかなあ」「自分も似たような状況に陥ったことがあったな」などといった思いが頭の中を駆けめぐる。

このように、本を読むことは、自分を見つめ直すきっかけになる。本を読むことで、日頃忘れていた自分と出会うことができる。書かれている文章に刺激されて、長らく意識にのぼることがなかったいろいろな時期の自分に触れることができる。

本を読まずにいると、そうした自分に触れる機会をもつことがないまま日常が過ぎていき、自分を見失うことになってしまう。

本を読むことには、自分自身に出会うという※効用のみならず、異

質な知識やものの見方・考え方に会うという効用もある。

ネットの世界では、何かを検索すると、関連する情報が自動的に選別されて出てくるし、使用者の履歴をもとに関心をもちそうな情報が選び出されて表示される。また、興味のある見出ししか※クリックしないため、出会う情報が非常に偏ったものになってしまう。自分の考えに対する反証になるような情報にはあえて目を向けようとしない。興味のない情報や意見にはわざわざ目を向けることがない。

そのため、異質なものの見方・考え方に触れる機会がなく、自分のものの見方・考え方に凝り固まってしまいがちだ。ネット上で喧嘩のような※誹謗中傷が目立つのも、自分と違うものの見方・考え方を理解できないし、理解しようという心構えもないからだろう。いわゆる「自己中心性からの脱却ができていない」。

心の世界を広げ、異質な他者に対する※寛容な態度を身につけるという意味でも、読書によっていろんなものの見方・考え方に触れるのは大切なことである。

さらには、いろんな視点を自分の中に取り込むことで、物事を多角的にみることができ、深くじっくりと考えることができるようになる。そうした読書の効用を活かすには、関心の幅を狭めずに、あえていろんな領域の本を読むように心がけるのがよい。その意味でも、家庭や学校では、さまざまな領域の本を揃える工夫が必要である。

(榎本博明『読書する子は〇〇がすごい』一部表記改め)

〔注〕

- ※語い…その人が使う言葉の総体。
- ※LINE…スマートフォンで使用できるメール機能をもつアプリ。
- ※促進…物事が速く進むように働きかけること。
- ※認知…あることがらに接して知識を得たり、何らかの判断を下したりする心理的な過程。
- ※媒介…二つのもの間に立って、何らかの関係をつけること。
- ※SNS…情報交換や交流ができるインターネット上のサービス。
ソーシャル・ネットワーキング・サービス。
- ※寄与…役立つこと。
- ※顕著…きわだって目につくこと。
- ※熟成…時間をかけてしこんだものが使えるようになること。
- ※盗作…他人の作品を無断で使うこと。
- ※カウンセリング…なやみや問題を解決するため、助言をあたえること。
- ※効用…役に立つこと。
- ※クリック…コンピュータの画面上で何かを選ぶ際、マウスのボタンをおすこと。
- ※誹謗中傷…根柢のない悪口を言って相手を傷つけること。
- ※脱却…良くない状態からぬけ出ること。
- ※寛容…心が広く、人の言動をよく受け入れること。

〔問題1〕

自分の記憶を検索しているとありますが、どういうことですか。ここで筆者が言いたいことを、わかりやすく四十字以内で説明しなさい。

〔問題2〕

自己中心性からの脱却ができていないとありますが、どういうことですか。文中の言葉を用いて、六十字以内で説明しなさい。

〔問題3〕

インターネットを利用することの便利さ、読書の効用について、次の「手順」と「きまり」にしたがって四百字以上四百四十字以内で書きなさい。

〔手順〕

- 1 インターネットを利用することの便利さの具体例を考えて書く。
- 2 読書の効用について、「文章」をもとに書く。
- 3 1・2をふまえて、あなたが考えたことを書く。

〔きまり〕

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。
- 、「や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの

記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じ
ますめに書きます(ますめの下に書いてもかまいません)。

○。と「」が続く場合には、同じますめに書いてもかま
いません。この場合、「。」で一字と数えます。

○段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えま
す。

○最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。